

## 課題別研究

### 「言語習得からみる小中連携の英語指導一文の仕組みへの気づき・音声から文字へ・CLIL」

司会進行： 柏木賀津子（大阪教育大学）

発表者：

グループ① 柏木賀津子（大阪教育大学）伊藤由紀子（大阪教育大学 大阪市立高津中学校）

李静香（大阪市立墨江丘中学校）小野原真理（大阪市立美津島中学校）

グループ② 村上加代子（神戸山手短期大学）チェン敦子（神戸山手短期大学）

グループ③ 山野有紀（宇都宮大学）犬塚章夫（刈谷市立小高原小学校）安達理恵（愛知大学）森下祐美子（大阪教育大学附属高校池田校舎）

本発表は、昨年の問題別討論会に引き続き行うもので、プロジェクトの目的は、第2言語習得理論、およびヨーロッパやアジアの英語教育の現状と課題から、EFLにおける日本の小中学校で可能な小中連携の英語指導について研究・実践を行うことである。具体的には、3本の柱として、1) 文構造への気づき、2) 音声から文字への段階的指導、3) CLIL、について国内外の研究を踏まえて実践例を提案する。本プロジェクトは、クラスルームでの実践授業をとおした教材開発や実証研究を主とする。

#### ① 文の仕組みへの気づき

「文構造への気づき」については、Anderson (1993) の述べる ACT-R に基づき、“rule to instance”よりも“instance to rule”を優先した指導を行う。ひとまとまりの表現 (formulaic sequences: FS) の蓄積が文法への繊細さ (grammatical sensitivity) をどの程度支えるかについて、インプットからプロセッシングに移行する際に学習者が「手続き的知識」を得られるように授業作りを行い、効果検証を行う。現在までの研究では、小学校6年生で動詞フレーズ (例: I can play the piano 等) において、音声のみによる文法性判断テストを行ったところ、英語の語順や文構造への気づきがあることが分かっている (浦田・柏木・中田, 2014)。昨年度は、小学校から引き続いて読み聞かせを継続し、動詞フレーズの現在分詞の形態素 (-ing) について検証した (伊藤)。全8時間の指導を行った。1) be+~ing を絵カード等で想起、2) structured input とディクトグロス、3) 中盤以降で母語での10分間の明示的文法説明とした。その結果、事前と事後で「形態素の欠落(-ing)」に差がみられ (正解率 61%<74%,  $t(94)=2.73$ ,  $**p=.007$ ) 「語順の違和感 (前置詞)」 (31%<59%,  $t(94)=4.08$ ,  $**p=.007$ ) に顕著な差が認められた。文構造に対する正解判断は事前、事後ともに高い値 (77%) であった。このことから、FS を蓄積してきた生徒は文法的への繊細な気づきがあることが明らかになっている。さらに、本年度は、中学校2年生 (X群: 134人, Y群: 62人) で、受動態の導入と指導は、50分×4時間、2群プレテスト・ポストテスト比較を用いる (文法性判断テスト, 時間制英作文)。FS は受動態のひとまとまりの表現 (is cooked by 等) について検証した。実験群では、1) 受動態が自然に入る structured input を用いた絵本を作成し読み聞かせ (『サラダで元気』)、2) 受動態をもちいて生徒と Q&A、3) 5つ程度の受動態の FS をもちい、スーパーの食材やチラシを活用したメニューのスピーチ、4) スピーチ発表、5) FS をチャンツにのせて声に出す、6) 受動態について持っているイメージに乗せてパワーポイントで文構造を図式で説明した。統制群では、英作文や声に出すことは同様に行うが、伝統的な rule to instance で行う。X群もY群も事前に有意差はなかったが、X群は、事後に実験群がより伸びた (EX: Mean 9.63, Non-EX: Mean 8.42,  $t(62,71)=-2.18$ ,  $*p=.031$ ,  $d=.36$  効果量小)。一方Y群は、事後に統制群に有意な差

が認められた (EX: Mean 12.44, Non-EX: Mean 14,  $t(33,27)=-2.2$ ,  $*p=.032$ ,  $d=.56$ , 効果量大)。しかし、共に実験群では度数分布変化に一定の傾向が見つかり、Y 群では、遅延テスト (応答 GJT) も行ったところ、実験群のスコアは長く保たれ、スコアが伸びていることが分かった。発表では、実際の指導法をビデオ等で報告する。Ellis(2012)は、FS の蓄積が文法への繊細さ (grammatical sensitivity) をかなり支え、実際の言語使用で最小の認知単位としてはたらし、実際に使えるまでに時間がかかる文法ルールとの間を埋めると述べている。本研究ではこの点に対して一定の示唆を得て、小中の英語授業への積極性や文構造への興味を喚起できたのではないだろうか。

## ② 音声から文字へ-小学校で育てたい英語の音韻認識

英語の基本的な読み書きの発達において音素レベルの音韻意識の獲得は必須であるとされている。しかし音韻意識の発達は個人差が大きく、英語圏でも幼児期には明示的な指導が行われている。本研究では「聞く」「気づく」「操る」の3ステップで育てる英語の音韻意識活動を提案し、小学生の音韻意識の現状と課題について考察する。一般的に音韻意識は大きな単位からより細かな単位へと段階的に発展するため、H27年度はライムと音節に焦点を絞った。活動は、リズムに合わせた手拍子など体を動かし、楽しめる内容である。指導対象は、公立小学校の2年生約100名である。期間は6月から11月までで、活動は外国語活動の時間を用い、一回あたり10分程度合計6回実施した。指導の効果を測定するため、pre-postテストを実施した。テストの正答率は、ライム課題は12.7%から52.4%、音節課題は8.4%から70.9%へと向上した。音節活動では英語の分節化が予想以上に早く身につくなどの気づきのほか、母音の聞き分けの難しさなど今後の課題についても確認された。発表では結果と児童らの変化、モジュール型の音韻意識活動案について紹介したい。

## ③ CLIL (内容言語統合型学習)

CLIL グループでは、3名の発表者による多様な CLIL 実践から、小学校を基点とする日本の英語教育への CLIL 活用について考える。第一に、CLIL の起源となっているヨーロッパにおいて CLIL を高校最終学年で必修化としたイタリアの小学校での授業観察より、日本の英語教育において有益と考えられる点について4Cの観点より指摘し、実際に発表者がイタリアで行った水に関する Total CLIL (授業の全てを CLIL で行う授業形態: Content: 理科, Communication: How much water do people use? など, Cognition: 世界の水環境について考える, Community/Culture: 各国の水環境の現実) について報告する。次に、日本の公立小学校において行った世界の時差に関する Partial CLIL 授業 (授業の一部に CLIL 的活動を取り入れる授業形態: Content: 社会・算数・図工, Communication: What time ~?, Cognition: 時差について考える, Community/Culture: 世界の時間) について報告し、日本の文脈への活用おける課題について述べる。最後に、日本の公立小学校で行った担任教諭 (専門: 理科) による Total CLIL (Content: 酸性雨 (理科), Communication: Is this ~? など, Cognition: 酸性雨について考える, Community/Culture: 世界の酸性雨問題) 授業について報告する。特に、児童の思考 (推測・検証) を促し、学習への関わり (Involvement) を深めながら、Authentic な理科学習素材を活用し form-meaning mapping を行っていく、担任教諭主導の CLIL 授業について提案する。